

本興寺だより

令和四年
八月
第三六号

「悪の中の大悪は我が身にその苦を受けるのみならず、子と孫と子孫へ七代までも影響を及ぼすなり。善の中の大善も又かくの如し」 (宗祖 孟蘭盆御書)

安倍元総理の暗殺、カルト宗教の実体、ウクライナ戦争の悲惨さ等、暗いニュースが目に残ります。尊さを自覚して生きるべき人の心が、自分の信じる「正義」の御旗の元に他を顧みない恐ろしい鬼の心となり、事件を起こしています。

先日、秋葉原通り魔事件(平成二十年)で十七人を殺傷した犯人、加藤智大の死刑が執行されました。かつて大阪の池田小学校に乱入して児童等二十三人を殺傷(平成十三年)させ死刑が執行された宅間守の裁判記録も見ましたが、大事件を起こす人は、幼少から壮絶な人生を歩んだ人が多いのです。

宅間守は、死刑判決が出た最後の法廷で、「自分は社会の負け組で、社会の不公平や不条理を芯から味わっている。襲った池田小の子供の親は、財産や名誉もある云々勝ち組である。勝ち組の者(家庭)にも、世の中には理不尽や不条理があることを思い知らせてやったのだ」という旨の暴言を吐いています。幼少からの心の闇が、底なしに大きくなり、家族へ

で終わらせるのではなく、故人に思いを馳せ、人柄や思い出を懐かしみ、故人を忘れないことです。

その気持ちを形として表すのが追善供養なのです。お盆は十三日が迎え火、十六日が送り火です。

お盆にはご先祖の御霊を迎え、各家で精霊棚を作ってお供えし、供養し、共に語らうの場を持ちます。盆踊りは還って来る先祖の御霊をもてなし、供養する行事です。この時期行いう花火(大会)にも、鎮魂と慰霊の意味があります。

魂には死を挟んで、この世とあの世の二つの生があるのです。供養の「供」は、人(イ)が共にいるという字です。私たちの側に亡き人が、目には姿は見えずとも、耳には言葉が聞こえなくても何時も居られるという信を忘れないことなのです。養とは生者と死者の違いはあっても、共に今を生きて、魂を助け合って養い合って生きることです。養の中には食の字が入ります。

私たちは食によって力が出るように、御霊も供養を受けることによって力を増すのです。

ある人は、お盆の間帰って来られる大切な御霊のために、十三、十六日の四日間毎食、家族と同じ食事を用意してお迎えし語らっています。生前の時と同じように。生前の時は家族の分の食事を毎回用意するのが当たり前で何の苦にもなりません。

しかし亡くなれば、無意識の心の中にも、「もうこの世にいない。何をあげても、亡き人はわからないだろうから張り合いがない」と思ってしまう、供物をあ

の恨み、社会への恨みと転化して犯罪を犯しています。家庭の情操教育が如何に大切であるかを実感させられます。

人は社会で多くの人の関わりの中で生きています。自分の生き方、考え方、言動が、善くも悪くも他人の人生に深く関わっていることを自覚して生きること、例え願いが叶わなくても、理不尽と思われることがあっても、それらを包み込んで生きる豊かな感情や情緒を育むことが大切であると説かれています。

日蓮聖人は冒頭の文のように、人の心持ちや行為は、それが善きことであれ。悪しきことであれ、どちらも子々孫々まで影響するのだと云われています。

肉体は遺伝子として子孫に引き継がれることはわかりますが、心の善悪の思いがどうして子孫に影響を及ぼすか疑問に感じる人もおられるかと思いますが、それは魂が不滅であり、ご先祖の御霊がそれを感じ取ることができるからなのだと云われています。

善い(よい)とは道徳的に人の行いが正しいこと。良い(よい)とは好ましいこと、優れていることです。従って人の行いや性格は単に「良」ではなく「善」でなければならないのです。

お盆が近づいてきました。亡き人、ご先祖のことを単に思うよりも、想う(思うよりも感情を込めて)へ、更に偲ぶ気持ちが大切なのです。

偲ぶとは、大切な人の死を悲しみ嘆(なげ)くだけ

げることが苦になり途絶えるのです。

話は変わりますが、伊藤園のお茶は販売当初は「缶入り煎茶」の名称で売り出したのが、売り上げが低迷していたところ、発売四年後に「おきいお茶」と商品名を変えたところ、全国的に爆発的に売れ出したということです。「おきい」をつけるだけで人は家庭内のくつろいだ言葉に似て身近に感じるのです。

本題に戻りますが、生きていれば食事が出なければ「おきいお茶」のように掛け声をかけます。催促されれば「ハイハイ、お待たせ」と言ってお出します。しかし死者は何事も催促しないのです。それ故ご供養が疎かになり易いのです。

ある人は、仏壇専用の食器棚を持っていて、季節ごとに器を替えてお供えしています。私も春夏秋冬季節に応じた服装をするように。ご神仏とご先祖から何時も見守られていることに気付けば、人は必ず生き方や供養に対する心持ちが変わって来るのだと云われています。お墓参りや仏壇にお参りする時、故人の生前の姿と交わした言葉がよみがえります。

亡き人との絆を深く感じ、心の支えともなります。俳句大賞に「ぬか床に 太古の祖母が住みにけり」とありました。どの家庭も何代もの先祖の人々が家を守り、祈りを捧げ、どれだけ子孫への願いを込められて逝かれたか。その想いに供養でしつかり答えていくことが大事だと説かれています。

